CHAPTER 5

ハリーとダンブルドアは、「隠れ穴」の裏口 に近づいた。

いつものように古いゴム長靴や錆びた大鍋が 周りに散らかっている。

遠くの鳥小屋から、コッコッと鶏の低い眠そうな鳴き声が聞こえた。

ダンブルドアが三度戸を叩くと、台所の窓越 しに、中で急に何かが動くのがハリーの目に 入った。

「誰? |神経質な声がした。

ハリーにはそれがウィーズリーおばさんの声 だとわかった。

「名を名乗りなさい! |

「わしじゃ、ダンブルドアじゃよ。ハリーを連れておる」すぐに戸が開いた。

背の低い、ふっくらしたウィーズリーおばさんが、着古した緑の部屋着を着て立っていた。

「ハリー、まあ! まったく、アルバスったら、ドキッとしたわ。明け方前には着かないっておっしゃったのに!」

「運がよかったのじゃ」ダンブルドアがハリーを中へと誘いながら言った。

「スラグホーンは、わしが思ったよりずっと 説得しやすかったのでな。もちろんハリーの お手柄じゃ。ああ、これはニンファドー ラ! |

ハリーが見回すと、こんな遅い時間なのに、 ウィーズリーおばさんは一人ではなかった。 くすんだ茶色の髪にハート形の蒼白い顔をし た若い魔女が、大きなマグを両手に挟んでテ ーブル脇に座っていた。

「こんばんは、先生」魔女が挨拶した。

「よう、ハリー」

「やあ、トンクス」

ハリーはトンクスがやつれたように思った。 病気かもしれない。

無理をして笑っているようだったが、見た目には、いつもの風船ガムピンクの髪をしていないので、間違いなく色褪せている。

「わたし、もう帰るわ」

トンクスは短くそう言うと、立ち上がってマントを肩に巻きつけた。

Chapter 5

An Excess of Phlegm

Harry and Dumbledore approached the back door of the Burrow, which was surrounded by the familiar litter of old Wellington boots and rusty cauldrons; Harry could hear the soft clucking of sleepy chickens coming from a distant shed. Dumbledore knocked three times and Harry saw sudden movement behind the kitchen window.

"Who's there?" said a nervous voice he recognized as Mrs. Weasley's. "Declare yourself!"

"It is I, Dumbledore, bringing Harry."

The door opened at once. There stood Mrs. Weasley, short, plump, and wearing an old green dressing gown.

"Harry, dear! Gracious, Albus, you gave me a fright, you said not to expect you before morning!"

"We were lucky," said Dumbledore, ushering Harry over the threshold. "Slughorn proved much more persuadable than I had expected. Harry's doing, of course. Ah, hello, Nymphadora!"

Harry looked around and saw that Mrs. Weasley was not alone, despite the lateness of the hour. A young witch with a pale, heart-shaped face and mousy brown hair was sitting at the table clutching a large mug between her hands.

"Hello, Professor," she said. "Wotcher, Harry."

"Hi, Tonks."

Harry thought she looked drawn, even ill,

「モリー、お茶と同情をありがとう」

「わしへの気遣いでお帰りになったりせんよう」ダンブルドアが優しく言った。

「わしは長くはいられないのじゃ。ルーファス・スクリムジョールと、緊急に話し合わね はならんことがあってのう」

「いえ、いえ、わたし、帰らなければいけないの」トンクスはダンブルドアと目を合わせなかった。

「おやすみーー」

「ねえ、週末の夕食にいらっしゃらない?リーマスとマッド・アイも来るしーー?」

「ううん、モリー、だめ……でもありがとう ……みんな、おやすみなさい」

トンクスは急ぎ足でダンブルドアとハリーのそばを通り、庭に出た。

戸口から数歩離れたところで、トンクスはくるりと回り、跡形もなく消えた。

ウィーズリーおばさんが心配そうな顔をしているのに、ハリーは気づいた。

「さて、ホグワーツで会おうぞ、ハリー」 ダ ンブルドアが言った。

「くれぐれも気をつけることじゃ。モリー、 ご機嫌よろしゅう」

ダンブルドアはウィーズリー夫人に一礼して、トンクスに続いて出ていき、まったく同じ場所で姿を消した。

庭に誰もいなくなると、ウィーズリーおばさんは戸を閉め、ハリーの肩を押して、テーブルを照らすランタンの明るい光の所まで連れていき、ハリーの姿を確かめた。

「ロンと同じだわ」

ハリーを上から下まで眺めながら、おばさん がため息をついた。

「二人ともまるで『引き伸ばし呪文』にかかったみたい。この前ロンに学校用のローブを買ってやってから、あの子、間違いなく十センチは伸びてるわね。ハリー、お腹空いてない? |

「うん、空いてる」ハリーは、突然空腹感に 襲われた。

「お座りなさいな。何かあり合わせを作るから」

腰掛けたとたん、ぺちゃんこ顔の、オレンジ 色の毛がふわふわした猫が膝に飛び乗り、喉 and there was something forced in her smile. Certainly her appearance was less colorful than usual without her customary shade of bubblegum-pink hair.

"I'd better be off," she said quickly, standing up and pulling her cloak around her shoulders. "Thanks for the tea and sympathy, Molly."

"Please don't leave on my account," said Dumbledore courteously, "I cannot stay, I have urgent matters to discuss with Rufus Scrimgeour."

"No, no, I need to get going," said Tonks, not meeting Dumbledore's eyes. "'Night—"

"Dear, why not come to dinner at the weekend, Remus and Mad-Eye are coming — ?"

"No, really, Molly ... thanks anyway ... Good night, everyone.

Tonks hurried past Dumbledore and Harry into the yard; a few paces beyond the doorstep, she turned on the spot and vanished into thin air. Harry noticed that Mrs. Weasley looked troubled.

"Well, I shall see you at Hogwarts, Harry," said Dumbledore. "Take care of yourself. Molly, your servant."

He made Mrs. Weasley a bow and followed Tonks, vanishing at precisely the same spot. Mrs. Weasley closed the door on the empty yard and then steered Harry by the shoulders into the full glow of the lantern on the table to examine his appearance.

"You're like Ron," she sighed, looking him up and down. "Both of you look as though you've had Stretching Jinxes put on you. I swear Ron's grown four inches since I last bought him school robes. Are you hungry, をゴロゴロ鳴らしながら座り込んだ。

「じゃ、ハーマイオニーもいるの?」

クルックシャンクスの耳の後ろをカリカリ掻 きながら、ハリーはうれしそうに聞いた。

「ええ、そうよ。一昨日着いたわ」

ウィーズリーおばさんは、大きな鉄鍋を杖で コツコツ叩きながら答えた。

鍋はガランガランと大きな音を立てて飛び上がり、竈に載ってたちまちグツグツ煮え出した。

「もちろん、みんなもう寝てますよ。あなた があと数時間は来ないと思ってましたから ね。さあ、さあーー」

おばさんは、また鍋を叩いた。鍋が宙に浮き、ハリーのほうに飛んできて傾いた。

ウィーズリーおばさんは深皿をさっとその下に置き、とろりとしたオニオンスープが湯気を上げて流れ出すのを見事に受けた。

「パンはいかが?」

「いただきます」

おばさんが肩越しに杖を振ると、パン一塊と ナイフが優雅に舞い上がってテーブルに降り た。

パンが勝手に切れて、スープ鍋が竈に戻ると、ウィーズリーおばさんはハリーの向かい側に腰掛けた。

「それじゃ、あなたがホラス・スラグホーン を説得して、引き受けさせたのね?」 ロがスープで一杯で託せなかったので、ハル

口がスープで一杯で話せなかったので、ハリーは頷いた。

「アーサーも私もあの人に教えてもらった の」おばさんが言った。

「長いことホグワーツにいたのよ。ダンブルドアと同じころに教えはじめたと思うわ。あの人のこと、好き?」

こんどはパンで口が塞がり、ハリーは肩をすくめて、どっちつかずに首を振った。

「そうでしょうね」おばさんはわけ知り顔で 頷いた。

「もちろんあの人は、その気になればいい人になれるわ。だけどアーサーは、あの人のことをあんまり好きじゃなかった。魔法省はスラグホーンのお気に入りだらけょ。あの人はいつもそういう手助けが上手なの。でもアーサーにはあんまり目をかけたことがなかった

Harry?"

"Yeah, I am," said Harry, suddenly realizing just how hungry he was.

"Sit down, dear, I'll knock something up."

As Harry sat down, a furry ginger cat with a squashed face jumped onto his knees and settled there, purring.

"So Hermione's here?" he asked happily as he tickled Crookshanks behind the ears.

"Oh yes, she arrived the day before yesterday," said Mrs. Weasley, rapping a large iron pot with her wand. It bounced onto the stove with a loud clang and began to bubble at once. "Everyone's in bed, of course, we didn't expect you for hours. Here you are —"

She tapped the pot again; it rose into the air, flew toward Harry, and tipped over; Mrs. Weasley slid a bowl neatly beneath it just in time to catch the stream of thick, steaming onion soup.

"Bread, dear?"

"Thanks, Mrs. Weasley."

She waved her wand over her shoulder; a loaf of bread and a knife soared gracefully onto the table; as the loaf sliced itself and the soup pot dropped back onto the stove, Mrs. Weasley sat down opposite him.

"So you persuaded Horace Slughorn to take the job?"

Harry nodded, his mouth so full of hot soup that he could not speak.

"He taught Arthur and me," said Mrs. Weasley. "He was at Hogwarts for ages, started around the same time as Dumbledore, I think. Did you like him?"

His mouth now full of bread, Harry

--出世株だとは思わなかったらしいの。でも、ほら、スラグホーンにだって、それこそ目違いってものがあるのよ。ロンはもう手紙で知らせたかしらーーごく最近のことなんだけどーーアーサーが昇格したの!」

ウィーズリーおばさんが、はじめからこれを 言いたくてたまらなかったことは、火を見る より明らかだった。

ハリーは熱いスープをしこたま飲み込んだ。 喉が火ぶくれになるのがわかるような気がした。

「すごい!」ハリーが息を呑んで言った。 「やさしい子ね」ウィーズリーおばさんがニ ッコリした。

ハリーが涙目になっているのを、知らせを聞いて感激していると勘違いしたらしい。

「そうなの。ルーファス・スクリムジョールが、新しい状況に対応するために、新しい局をいくつか設置してね、アーサーは『偽の防衛呪文ならびに保護器具の発見ならびに没収局』の局長になったのよ。とっても大切な仕事で、いまでは部下が十人いるわ!」

「それって、何を一一?」

「ええ、あのね、『例のあの人』がらみのパ ニック状態で、あちこちでおかしな物が売ら れるようになったの。『例のあの人』や『死 喰い人』から護るはずのいろんな物がね。ど んな物か想像がつくというものだわ……保護 薬と称して実は腫れ草の膿を少し混ぜた肉汁 ソースだったり、防衛呪文のはずなのに、実 際は両耳が落ちてしまう呪文を教えたり…… まあ、犯人はだいたいがマンダンガス・フレ ッチャーのような、まっとうな仕事をしたこ とがないような連中で、みんなの恐怖につけ 込んだ仕業なんだけど、ときどきとんでもな い厄介な物が出てくるの。このあいだアーサ 一が、呪いのかかった『かくれん防止器』を 一箱没収したけど、死喰い人が仕掛けたもの だということは、ほとんど間違いないわ。だ からね、とっても大切なお仕事なの。それ で、アーサーに言ってやりましたとも。点火 プラグだとかトースターだとか、マグルのガ ラクタを処理できないのが寂しいなんて言う のは、ばかげてるってね」

ウィーズリーおばさんは、点火プラグを懐か

shrugged and gave a noncommittal jerk of the head.

"I know what you mean," said Mrs. Weasley, nodding wisely. "Of course he can be charming when he wants to be, but Arthur's never liked him much. The Ministry's littered with Slughorn's old favorites, he was always good at giving leg ups, but he never had much time for Arthur — didn't seem to think he was enough of a highflier. Well, that just shows you, even Slughorn makes mistakes. I don't know whether Ron's told you in any of his letters — it's only just happened — but Arthur's been promoted!"

It could not have been clearer that Mrs. Weasley had been bursting to say this.

Harry swallowed a large amount of very hot soup and thought he could feel his throat blistering. "That's great!" he gasped.

"You are sweet," beamed Mrs. Weasley, possibly taking his watering eyes for emotion at the news. "Yes, Rufus Scrimgeour has set up several new offices in response to the present situation, and Arthur's heading the Office for the Detection and Confiscation of Counterfeit Defensive Spells and Protective Objects. It's a big job, he's got ten people reporting to him now!"

"What exactly —?"

"Well, you see, in all the panic about You-Know-Who, odd things have been cropping up for sale everywhere, things that are supposed to guard against You-Know-Who and the Death Eaters. You can imagine the kind of thing — so-called protective potions that are really gravy with a bit of bubotuber pus added, or instructions for defensive jinxes that actually make your ears fall off. ... Well, in the main the perpetrators are just people like

しがるのは当然だと言ったのがハリーである かのように、厳しい目つきで話し終えた。

「ウィーズリーおじさんは、まだお仕事中で すか?」ハリーが聞いた。

「そうなのよ。実は、ちょっとだけ遅すぎるんだけど……真夜中ごろに戻るっておっしゃっていたから……」

おばさんはテーブルの端に置いてある洗濯物 籠に目をやった。

籠に積まれたシーツの山の上に、大きな時計 が危なっかしげに載っていた。

ハリーはすぐその時計を思い出した。

針が九本、それぞれに家族の名前が書いてある。

いつもはウィーズリー家の居間に掛かっているが、いま置いてある場所から考えると、ウィーズリーおばさんが家中持ち歩いているらしい。

九本全部がいまや「命が危ない」を指していた。

「このところずっとこんな具合なのよ」 おばさんが何気ない声で言おうとしているの が、見え透いていた。

「『例のあの人』のことが明るみに出て以来ずっとそうなの。いまは、誰もが命が危ない状況なのでしょうけれど……うちの家族だけということはないと思うわ……でも、ほかにこんな時計を持っている人を知らないから、確かめようがないの。あっ!」

急に叫び声を上げ、おばさんが時計の文字盤 を指した。

ウィーズリーおじさんの針が回って「移動 中」になっていた。

「お帰りだわ!」

そしてそのとおり、まもなく裏口の戸を叩く 音がした。

ウィーズリーおばさんは勢いよく立ち上がり、ドアへと急いだ。

片手をドアの取っ手にかけ、顔を木のドアに押しっけて、おばさんが小声で呼びかけた。 「アーサー、あなたなの?」

「そうだ」ウィーズリーおじさんの疲れた声が聞こえた。

「しかし、私が『死喰い人』だったとしても 同じことを言うだろう。質問しなさい!」 Mundungus Fletcher, who've never done an honest day's work in their lives and are taking advantage of how frightened everybody is, but every now and then something really nasty turns up. The other day Arthur confiscated a box of cursed Sneakoscopes that were almost certainly planted by a Death Eater. So you see, it's a very important job, and I tell him it's just silly to miss dealing with spark plugs and toasters and all the rest of that Muggle rubbish." Mrs. Weasley ended her speech with a stern look, as if it had been Harry suggesting that it was natural to miss spark plugs.

"Is Mr. Weasley still at work?" Harry asked.

"Yes, he is. As a matter of fact, he's a tiny bit late. ... He said he'd be back around midnight. ..."

She turned to look at a large clock that was perched awkwardly on top of a pile of sheets in the washing basket at the end of the table. Harry recognized it at once: It had nine hands, each inscribed with the name of a family member, and usually hung on the Weasleys' sitting room wall, though its current position suggested that Mrs. Weasley had taken to carrying it around the house with her. Every single one of its nine hands was now pointing at "mortal peril."

"It's been like that for a while now," said Mrs. Weasley, in an unconvincingly casual voice, "ever since You-Know-Who came back into the open. I suppose everybody's in mortal danger now. ... I don't think it can be just our family ... but I don't know anyone else who's got a clock like this, so I can't check. Oh!"

With a sudden exclamation she pointed at the clock's face. Mr. Weasley's hand had switched to "traveling."

"He's coming!"

「まあ、そんな……」

「モリー! |

「はい、はい**……**あなたのいちばんの望みは何? |

「飛行機がどうして浮いていられるのかを解明すること」

ウィーズリーおばさんは頷いて、取っ手を回 そうとした。ところが向こう側でウィーズリ ーおじさんがしっかり取っ手を押さえている らしく、ドアは頑として閉じたままだった。 「モリー! 私も君にまず質問しなければならん!」

「アーサーったら、まったく。こんなこと、ばかげてるわ……」

「私たち二人きりのとき、君は私になんて呼んでほしいかね?」

ランタンの仄暗い明かりの中でさえ、ハリーはウィーズリーおばさんがまっ赤になるのがわかった。

ハリーも耳元から首が急に熱くなるのを感じて、できるだけ大きな音を立ててスプーンと 皿をガチャつかせ、慌ててスープをがぶ飲み した。

おばさんは恥ずかしさに消え入りたそうな様子で、ドアの端の隙間に向かって囁いた。

「かわいいモリウォブル」

「正解」ウィーズリーおじさんが言った。 「さあ中に入れてもいいよ」

おばさんが戸を開けると、夫が姿を現した。 赤毛が禿げ上がった細身の魔法使いで、角縁 メガネをかけ、長い埃っぽい旅行用マントを 着ている。

「あなたがお帰りになるたびにこんなことを繰り返すなんて、私、いまだに納得できないわ」

夫のマントを脱がせながら、おばさんはまだ 類を染めていた。

「だって、あなたに化ける前に、死喰い人は あなたから無理やり答えを聞き出したかもし れないでしょ!」

「わかってるよ、モリー。しかしこれが魔法省の手続きだし、私が模範を示さないと。何かいい匂いがするねーーオニオンスープかな?」

ウィーズリー氏は、期待顔で匂いのするテー

And sure enough, a moment later there was a knock on the back door. Mrs. Weasley jumped up and hurried to it; with one hand on the doorknob and her face pressed against the wood she called softly, "Arthur, is that you?"

"Yes," came Mr. Weasley's weary voice. "But I would say that even if I were a Death Eater, dear. Ask the question!"

"Oh, honestly ..."

"Molly!"

"All right, all right ... What is your dearest ambition?"

"To find out how airplanes stay up."

Mrs. Weasley nodded and turned the doorknob, but apparently Mr. Weasley was holding tight to it on the other side, because the door remained firmly shut.

"Molly! I've got to ask you your question first!"

"Arthur, really, this is just silly. ..."

"What do you like me to call you when we're alone together?"

Even by the dim light of the lantern Harry could tell that Mrs. Weasley had turned bright red; he himself felt suddenly warm around the ears and neck, and hastily gulped soup, clattering his spoon as loudly as he could against the bowl.

"Mollywobbles," whispered a mortified Mrs. Weasley into the crack at the edge of the door.

"Correct," said Mr. Weasley. "Now you can let me in."

Mrs. Weasley opened the door to reveal her husband, a thin, balding, red-haired wizard wearing horn-rimmed spectacles and a long ブルのほうを振り向いた。

「ハリー! 朝まで来ないと思ったのに!」 二人は握手し、ウィーズリーおじさんはハリーの隣の椅子にドサッと座り込んだ。 おばさんがおじさんの前にもスープを置いた。

「ありがとう、モリー。今夜は大変だった。 どこかのバカ者が『変化メダル』を売りはじ めたんだ。首にかけるだけで、自由に外見を 変えられるとか言ってね。十万種類の変身、 たった十ガリオン!」

「それで、それをかけると実際どうなる の?」

「だいたいは、かなり気持の悪いオレンジ色になるだけだが、何人かは、体中に触手のようなイボが噴き出してきた。聖マンゴの仕事がまだ足りないと言わんばかりだ!」

「フレッドとジョージならおもしろがりそう な代物だけど」おばさんがためらいがちに言 った。

「あなた、本当にーー?」

「もちろんだ!」おじさんが言った。

「あの子たちは、こんなときにそんなことはしない! みんなが必死に保護を求めているというときに!」

「それじゃ、遅くなったのは『変化メダル』 のせいなの?」

「いや、エレファント・アンド・キャッスルで性質の悪い『逆火呪い』があるとタレ込みがあった。しかし幸い、我々が到着したときにはもう、魔法警察部隊が片付けていた……」

ハリーは欠伸を手で隠した。

「もう寝なくちゃね」ウィーズリーおばさんの目はごまかせなかった。

「フレッドとジョージの部屋を、あなたのために用意してありますよ。自由にお使いなさいね」

「でも、二人はどこに?」

「ああ、あの子たちはダイアゴン横丁。悪戯 専門店の上にある、小さなアパートで寝起き しいるの。とっても忙しいのでね」ウィーズ リーおばさんが答えた。

「最初は正直言って、感心しなかったわ。で も、あの子たちはどうやら、ちょっと商才が and dusty traveling cloak.

"I still don't see why we have to go through that every time you come home," said Mrs. Weasley, still pink in the face as she helped her husband out of his cloak. "I mean, a Death Eater might have forced the answer out of you before impersonating you!"

"I know, dear, but it's Ministry procedure, and I have to set an example. Something smells good — onion soup?"

Mr. Weasley turned hopefully in the direction of the table.

"Harry! We didn't expect you until morning!"

They shook hands, and Mr. Weasley dropped into the chair beside Harry as Mrs. Weasley set a bowl of soup in front of him too.

"Thanks, Molly. It's been a tough night. Some idiot's started selling Metamorph-Medals. Just sling them around your neck and you'll be able to change your appearance at will. A hundred thousand disguises, all for ten Galleons!"

"And what really happens when you put them on?"

"Mostly you just turn a fairly unpleasant orange color, but a couple of people have also sprouted tentaclelike warts all over their bodies. As if St. Mungo's didn't have enough to do already!"

"It sounds like the sort of thing Fred and George would find funny," said Mrs. Weasley hesitantly. "Are you sure —?"

"Of course I am!" said Mr. Weasley. "The boys wouldn't do anything like that now, not when people are desperate for protection!"

"So is that why you're late, Metamorph-

あるみたい! さあ、さあ、あなたのトランク はもう上げてありますよ」

「おじさん、おやすみなさい」

ハリーは椅子を引きながら挨拶した。

クルックシャンクスが軽やかに膝から飛び降り、しゃなしゃなと部屋から出ていった。

「おやすみ、ハリー」おじさんが言った。 おばさんと二人で台所を出るとき、ハリー は、おばさんがちらりと洗濯物籠の時計に目 をやるのに気づいた。

針全部がまたしても「命が危ない」を指していた。

フレッドとジョージの部屋は三階にあった。 おばさんがベッド脇の小机に置いてあるラン プを杖で指すと、すぐに明かりが灯り、部屋 は心地よい金色の光で満たされた。

小窓の前に置かれた机には、大きな花瓶に花が生けてあった。

しかし、その芳しい香りでさえ、火薬のような臭いが漂っているのをごまかすことはできなかった。

床の大半は、封をしたままの、何も印もない 段ボール箱で占められていた。

ハリーの学校用トランクもその間にあった。 部屋は一時的に倉庫として使われているよう に見えた。

大きな洋箪笥の上にヘドウィグが止まっていて、ハリーに向かってうれしげにホーと一声鳴いてから、窓から飛び立っていった。

ハリーが来るまで狩りに出ないで待っていた のだと、ハリーにはわかっていた。

ハリーはおばさんにおやすみの挨拶をして、 パジャマに着替え、二つあるベッドの一つに 潜り込んだ。

枕カバーの中に何やら固い物があるので、中を探って引っぱり出すと、紫とオレンジ色のベタベタした物が出てきた。見覚えのある「ゲーゲー・トローチ」だった。

ハリーは独り笑いしながら横になり、たちま ち眠りに落ちた。

数秒後に、とハリーには思えたが、大砲のょうな音がしてドアが開き、ハリーは起こされてしまった。

ガバッと起き上がると、カーテンをサーッと

Medals?"

"No, we got wind of a nasty backfiring jinx down in Elephant and Castle, but luckily the Magical Law Enforcement Squad had sorted it out by the time we got there. ..."

Harry stifled a yawn behind his hand.

"Bed," said an undeceived Mrs. Weasley at once. "I've got Fred and George's room all ready for you, you'll have it to yourself."

"Why, where are they?"

"Oh, they're in Diagon Alley, sleeping in the little flat over their joke shop as they're so busy," said Mrs. Weasley. "I must say, I didn't approve at first, but they do seem to have a bit of a flair for business! Come on, dear, your trunk's already up there."

"'Night, Mr. Weasley," said Harry, pushing back his chair. Crookshanks leapt lightly from his lap and slunk out of the room.

"G'night, Harry," said Mr. Weasley.

Harry saw Mrs. Weasley glance at the clock in the washing basket as they left the kitchen. All the hands were once again at "mortal peril."

Fred and George's bedroom was on the second floor. Mrs. Weasley pointed her wand at a lamp on the bedside table and it ignited at once, bathing the room in a pleasant golden glow. Though a large vase of flowers had been placed on a desk in front of the small window, their perfume could not disguise the lingering smell of what Harry thought was gunpowder. A considerable amount of floor space was devoted to a vast number of unmarked, sealed cardboard boxes, amongst which stood Harry's school trunk. The room looked as though it was being used as a temporary warehouse.

Hedwig hooted happily at Harry from her

開ける音が聞こえた。

眩しい太陽の光が両眼を強く突つくようだった。

ハリーは片手で眼を覆い、もう一方の手でそ こいら中を触ってメガネを探した。

「どうじだんだ?」

「君がもうここにいるなんて、僕たち知らな かったぜ!」

興奮した大声が聞こえ、ハリーは頭のてっぺんにきつい一発を食らった。

「ロン、ぶっちゃだめよ!」女性の声が非難した。

ハリーの手がメガネを探し当てた。

急いでメガネをかけたものの、光が眩しすぎ てほとんど何も見えない。

長い影が近づいてきて、目の前で一瞬揺れた。

瞬きすると焦点が合って、ロン・ウィーズリーがニヤニヤ見下ろしているのが見えた。

「元気か?」

「最高さ」

ハリーは頭のてっぺんをさすりながら、また 枕に倒れ込んだ。

「君は?」

「まあまあさ」

ロンは、ダンボールを一箱引き寄せて座った。

「いつ来たんだ?ママがたったいま教えてくれた!」

「今朝一時ごろだ」

「マグルのやつら、大丈夫だったか? ちゃんと扱ってくれたか?」

「いつもどおりさ」

そう言う間に、ハーマイオニーがベッドの端 にちょこんと腰掛けた。

「連中、ほとんど僕に話しかけなかった。僕はそのほうがいいんだけどね。ハーマイオニー、元気? |

「ええ、私は元気ょ」

ハーマイオニーは、まるでハリーが病気に罹りかけているかのように、じっと観察していた。

ハリーにはその気持がわかるような気がしたが、シリウスの死やほかの悲惨なことを、いまは話したくなかった。

perch on top of a large wardrobe, then took off through the window; Harry knew she had been waiting to see him before going hunting. Harry bade Mrs. Weasley good night, put on pajamas, and got into one of the beds. There was something hard inside the pillowcase. He groped inside it and pulled out a sticky purpleand-orange sweet, which he recognized as a Puking Pastille. Smiling to himself, he rolled over and was instantly asleep.

Seconds later, or so it seemed to Harry, he was awakened by what sounded like cannon fire as the door burst open. Sitting bolt upright, he heard the rasp of the curtains being pulled back: The dazzling sunlight seemed to poke him hard in both eyes. Shielding them with one hand, he groped hopelessly for his glasses with the other.

"Wuzzgoinon?"

"We didn't know you were here already!" said a loud and excited voice, and he received a sharp blow to the top of the head.

"Ron, don't hit him!" said a girl's voice reproachfully.

Harry's hand found his glasses and he shoved them on, though the light was so bright he could hardly see anyway. A long, looming shadow quivered in front of him for a moment; he blinked and Ron Weasley came into focus, grinning down at him.

"All right?"

"Never been better," said Harry, rubbing the top of his head and slumping back onto his pillows. "You?"

"Not bad," said Ron, pulling over a cardboard box and sitting on it. "When did you get here? Mum's only just told us!"

"About one o'clock this morning."

「いま何時?朝食を食べ損ねたのかなあ?」ハリーが言った。

「心配するなよ。ママがお盆を運んでくるから。君が十分食ってない様子だって思ってるのさ」まったくママらしいよと言いたげに、ロンは目をグリグリさせた。

「それで、最近どうしてた?」

「別に。叔父と叔母のところで、どうにも動きが取れなかっただろ?」

「嘘つけ!」ロンが言った。

「ダンブルドアと一緒に出かけたじゃないか!」

「そんなにワクワクするようなものじゃなかったよ。ダンブルドアは、昔の先生を引退生活から引っぱり出すのを、僕に手伝ってほしかっただけさ。名前はホラス・スラグホーン」

「なんだ」ロンががっかりしたような顔をした。

「僕たちが考えてたのはーー」

ハーマイオニーがさっと警告するような目で ロンを見た。

ロンは超スピードで方向転換した。

「一一考えてたのは、たぶん、そんなことだろうってさ」

「ほんとか?」ハリーは、おかしくて聞き返した。

「ああ……そうさ、アンブリッジがいなくなったし、当然新しい『闇の魔術に対する防衛術』の先生がいるだろ?だから、えーと、どんな人?」

「ちょっとセイウチに似てる。それに、前は スリザリンの寮監だった。ハーマイオニー、 どうかしたの?」

ハーマイオニーは、いまにも奇妙な症状が現れるのを待つかのように、ハリーを見つめていたが、慌てて曖昧に微笑み、表情を取り繕った。しかし頬が少し紅潮していた。

「ううん、何でもないわ、もちろん! それで、んー、スラグホーンはいい先生みたいだった? |

「わかんない」ハリーが答えた。

「アンブリッジ以下ってことは、ありえない だろ?」

「アンブリッジ以下の人、知ってるわ」

"Were the Muggles all right? Did they treat you okay?"

"Same as usual," said Harry, as Hermione perched herself on the edge of his bed, "they didn't talk to me much, but I like it better that way. How're you, Hermione?"

"Oh, I'm fine," said Hermione, who was scrutinizing Harry as though he was sickening for something. He thought he knew what was behind this, and as he had no wish to discuss Sirius's death or any other miserable subject at the moment, he said, "What's the time? Have I missed breakfast?"

"Don't worry about that, Mum's bringing you up a tray; she reckons you look underfed," said Ron, rolling his eyes. "So, what's been going on?"

"Nothing much, I've just been stuck at my aunt and uncle's, haven't I?"

"Come off it!" said Ron. "You've been off with Dumbledore!"

"It wasn't that exciting. He just wanted me to help him persuade this old teacher to come out of retirement. His name's Horace Slughorn."

"Oh," said Ron, looking disappointed. "We thought —"

Hermione flashed a warning look at Ron, and Ron changed tack at top speed.

"— we thought it'd be something like that."

"You did?" said Harry, amused.

"Yeah ... yeah, now Umbridge has left, obviously we need a new Defense Against the Dark Arts teacher, don't we? So, er, what's he like?"

"He looks a bit like a walrus, and he used to be Head of Slytherin," said Harry. "Something 入口で声がした。ロンの妹がイライラしなが ら、突っかかるように前屈みの格好で入って きた。

「おはよ、ハリー」

「いったいどうした?」ロンが聞いた。

「あの女よ」ジニーはハリーのベッドにドサッと座った。

「頭に来るわ」

「あの人、こんどは何をしたの?」ハーマイオニーが同情したように言った。

「わたしに対する口のきき方よーーまるで三つの女の子に話すみたいに!」

「わかるわ」ハーマイオニーが声を落とした。

「あの人、ほんとに自意識過剰なんだから」 ハーマイオニーがウィーズリー夫人のことを こんなふうに言うなんて、とハリーは度肝を 抜かれ、ロンが怒ったように言い返すのも当 然だと思った。

「二人とも、ほんの五秒でいいから、あの女 をほっとけないのか?」

「えーえ、どうぞ、あの女をかばいなさい よ。あんたがあの女にメロメロなことぐら い、みんな知ってるわ」ジニーがピシャリと 言った。ロンの母親のことにしてはおかし い。

ハリーは何かが抜けていると感じはじめた。 「誰のことを--?」

質問が終わらないうちに答が出た。

部屋の戸が再びパッと開き、ハリーは無意識 に、ベッドカバーを思い切り顎の下まで引っ ぱり上げた。

おかげでハーマイオニーとジニーが床に滑り落ちた。

入口に若い女性が立っていた。

息を呑むほどの美しさに、部屋中の空気が全 部呑まれてしまったようだった。

背が高く、すらりとたおやかで、長いブロンドの髪。

その姿から微かに銀色の光が発散しているかのようだった。

非の打ち所ない姿をさらに完全にしたのは、 女性の捧げていたどっさり朝食が載った盆だった。

「アリー」ハスキーな声が言った。

wrong, Hermione?"

She was watching him as though expecting strange symptoms to manifest themselves at any moment. She rearranged her features hastily in an unconvincing smile.

"No, of course not! So, um, did Slughorn seem like he'll be a good teacher?"

"Dunno," said Harry. "He can't be worse than Umbridge, can he?"

"I know someone who's worse than Umbridge," said a voice from the doorway. Ron's younger sister slouched into the room, looking irritable. "Hi, Harry."

"What's up with you?" Ron asked.

"It's *her*," said Ginny, plonking herself down on Harry's bed. "She's driving me mad."

"What's she done now?" asked Hermione sympathetically.

"It's the way she talks to me — you'd think I was about three!"

"I know," said Hermione, dropping her voice. "She's so full of herself."

Harry was astonished to hear Hermione talking about Mrs. Weasley like this and could not blame Ron for saying angrily, "Can't you two lay off her for five seconds?"

"Oh, that's right, defend her," snapped Ginny. "We all know you can't get enough of her."

This seemed an odd comment to make about Ron's mother. Starting to feel that he was missing something, Harry said, "Who are you —?"

But his question was answered before he could finish it. The bedroom door flew open again, and Harry instinctively yanked the

「おいさしぶーりね! |

女性がさっと部屋の中に入り、ハリーに近づいてきたそのとき、かなり不機嫌な顔のウィズリーおばさんが、ひょこひょことあとから現れた。

「お盆を持って上がる必要はなかったのよ。 私が自分でそうするところだったのに!」 「なんでもありませーん」

そう言いながら、フラー・デラクールは盆を ハリーの膝に載せ、ふわーっと屈んでハリー の両頬にキスした。

ハリーはその唇が触れたところが焼けるよう な気がした。

「わたし、このいとに、とても会いたかったでーす。わたしのシースタのガブリエール、あなた覚えてますか? 『アリー・ポター』のこと、あの子、いつもあなしていまーす。また会えると、きーっとよろこびます」

「あ······あの子もここにいるの?」 ハリーの 声がしゃがれた。

「いえ、いーえ、おばかさーん」フラーは玉 を転がすように笑った。

「来年の夏で一す。そのときわたしたち…… あら、あなた知らないですか?」

フラーは大きな青い目を見開いて、非難する ようにウィーズリー夫人を見た。

おばさんは「まだハリーに話す時間がなかっ たのよ」と言った。

フラーは豊かなブロンドの髪を振ってハリー に向き直り、その髪がウィーズリー夫人の顔 を鞭のように打った。

「わたし、ビルと結婚しまーす!」 「ああ」ハリーは無表情に言った。

ウィーズリーおばさんもハーマイオニーもジニーも、決して目を合わせまいとしていることに、嫌でも気づかないわけにはいかなかった。

「ウワー、あ……おめでとう!」 フラーはまた躍りかかるように屈んで、ハリ ーにキスした。

「ビルはいま、と一ても忙しいです。アードにあらいていまーす。そして、わたし、グリンゴッツでパートタイムであたらいていまーす。えーいごのため。それで彼、わたしをしばら一くここに連れてきました。家族のいと

bedcovers up to his chin so hard that Hermione and Ginny slid off the bed onto the floor.

A young woman was standing in the doorway, a woman of such breathtaking beauty that the room seemed to have become strangely airless. She was tall and willowy with long blonde hair and appeared to emanate a faint, silvery glow. To complete this vision of perfection, she was carrying a heavily laden breakfast tray.

"Arry," she said in a throaty voice. "Eet 'as been too long!"

As she swept over the threshold toward him, Mrs. Weasley was revealed, bobbing along in her wake, looking rather cross.

"There was no need to bring up the tray, I was just about to do it myself!"

"Eet was no trouble," said Fleur Delacour, setting the tray across Harry's knees and then swooping to kiss him on each cheek: He felt the places where her mouth had touched him burn. "I 'ave been longing to see 'im. You remember my seester, Gabrielle? She never stops talking about 'Arry Potter. She will be delighted to see you again."

"Oh ... is she here too?" Harry croaked.

"No, no, silly boy," said Fleur with a tinkling laugh, "I mean next summer, when we — but do you not know?"

Her great blue eyes widened and she looked reproachfully at Mrs. Weasley, who said, "We hadn't got around to telling him yet."

Fleur turned back to Harry, swinging her silvery sheet of hair so that it whipped Mrs. Weasley across the face.

"Bill and I are going to be married!"

"Oh," said Harry blankly. He could not help

を知るためで一す。あなたがここに来るというあなしを聞いてうれしかったで一す。—— お料理と鶏が好きじゃないと、ここはあまり することがありませーん! じゃーー朝食を楽しーんでね、アリー! 」

そう言い終えると、フラーは優雅に向きを変え、ふわーっと浮かぶように部屋を出ていき、静かにドアを閉めた。

ウィーズリーおばさんが何か言ったが、「シッシッ!」と聞こえた。

「ママはあの女が大嫌い」ジニーが小声で言った。

「嫌ってはいないわ!」

おばさんが不機嫌に囁くように言った。

「二人が婚約を急ぎすぎたと思うだけ、それ だけです! |

「知り合ってもう一年だぜ」ロンは妙にフラフラしながら、閉まったドアを見つめていた。

「それじゃ、長いとは言えません! どうしてそうなったか、もちろん私にはわかりますよ。『例のあの人』が戻ってきていろいろでをになっているからだわ。明日にも死んでしまうかもしれないと思って。だから、普通ぐの。前にあの人が強力だったときも同じだったわ。あっちでもこっちでも、そこいらじゅうで駆け落ちして——」

「ママとパパも含めてね」ジニーがおちゃめ に言った。

「そうよ、まあ、お父さまと私は、お互いに ぴったりでしたもの。待つ意味がないでしょ う?」ウィーズリー夫人が言った。

「ところがビルとフラーは……さあ……どんな共通点があると言うの? ビルは勤勉で地味なタイプなのに、あの娘は--

「派手な雌牛」ジニーが頷いた。

「でもビルは地味じゃないわ。『呪い破り』でしょう? ちょっと冒険好きで、ワクワクするようなものに惹かれる……きっとそれだからヌラーに参ったのよ」

「ジニー、そんな呼び方をするのほおやめな さい」

ウィーズリーおばさんは厳しく言ったが、ハリーもハーマイオニーも笑った。

noticing how Mrs. Weasley, Hermione, and Ginny were all determinedly avoiding one another's gaze. "Wow. Er — congratulations!"

She swooped down upon him and kissed him again.

"Bill is very busy at ze moment, working very 'ard, and I only work part-time at Gringotts for my Eenglish, so he brought me 'ere for a few days to get to know 'is family properly. I was so pleased to 'ear you would be coming — zere isn't much to do 'ere, unless you like cooking and chickens! Well — enjoy your breakfast, 'Arry!"

With these words she turned gracefully and seemed to float out of the room, closing the door quietly behind her.

Mrs. Weasley made a noise that sounded like "tchah!"

"Mum hates her," said Ginny quietly.

"I do not hate her!" said Mrs. Weasley in a cross whisper. "I just think they've hurried into this engagement, that's all!"

"They've known each other a year," said Ron, who looked oddly groggy and was staring at the closed door.

"Well, that's not very long! I know why it's happened, of course. It's all this uncertainty with You-Know-Who coming back, people think they might be dead tomorrow, so they're rushing all sorts of decisions they'd normally take time over. It was the same last time he was powerful, people eloping left, right, and center—"

"Including you and Dad," said Ginny slyly.

"Yes, well, your father and I were made for each other, what was the point in waiting?" said Mrs. Weasley. "Whereas Bill and Fleur ... well ... what have they really got in common?

「さあ、もう行かなくちゃ……ハリー、温かいうちに卵を食べるのよ」

おばさんは悩み疲れた様子で、部屋を出ていった。

ロンはまだ少しクラクラしているようだっ た。

頭を振ってみたら治るかもしれないと、ロンは耳の水をはじき出そうとしている犬のょうな仕種をした。

「同じ家にいたら、あの人に慣れるんじゃないのか?」ハリーが聞いた。

「うん、たぶん」ロンが言った。

「だけど、あんなふうに突然飛び出してこら れると……」

「救いようがないわ」

ハーマイオニーが腹を立てて、つんけんしながらロンからできるだけ離れ、壁際で回れ右 して腕組みし、ロンのほうを向いた。

「あの人に、ずーっとうろうろされたくはないでしょう?」

まさかと言う顔で、ジニーがロンに聞いた。 ロンが肩をすくめただけなのを見て、ジニー が言った。

「とにかく、賭けてもいいけど、ママががん ばってストップをかけるわ」

「どうやってやるの?」ハリーが聞いた。

「トンクスを何度も夕食に招待しょうとしてる。ビルがトンクスのほうを好きになればいいって期待してるんだと思うな。そうなるといいな。家族にするなら、わたしはトンクスのほうがずっといい」

「そりゃあ、うまくいくだろうさ」ロンが皮肉った。

「いいか、まともな頭の男なら、フラーがいるのにトンクスを好きになるかよ。そりゃ、トンクスはまあまあの顔さ。髪の毛や鼻に変なことさえしなきゃ。だけど——」

「トンクスは、ヌラーよりめちゃくちゃいい 性格してるわよ」ジニーが言った。

「それにもっと知的よ。闇祓いですからね!」隅のほうからハーマイオニーが言った。

「フラーはバカじゃないよ。三校対抗試合選 手に選ばれたぐらいだ」ハリーが言った。

「あなたまでが!」ハーマイオニーが苦々し

He's a hardworking, down-to-earth sort of person, whereas she's —"

"A cow," said Ginny, nodding. "But Bill's not that down-to-earth. He's a Curse-Breaker, isn't he, he likes a bit of adventure, a bit of glamour. ... I expect that's why he's gone for Phlegm."

"Stop calling her that, Ginny," said Mrs. Weasley sharply, as Harry and Hermione laughed. "Well, I'd better get on. ... Eat your eggs while they're warm, Harry."

Looking careworn, she left the room. Ron still seemed slightly punch-drunk; he was shaking his head experimentally like a dog trying to rid its ears of water.

"Don't you get used to her if she's staying in the same house?" Harry asked.

"Well, you do," said Ron, "but if she jumps out at you unexpectedly, like then ..."

"It's pathetic," said Hermione furiously, striding away from Ron as far as she could go and turning to face him with her arms folded once she had reached the wall.

"You don't really want her around forever?" Ginny asked Ron incredulously. When he merely shrugged, she said, "Well, Mum's going to put a stop to it if she can, I bet you anything."

"How's she going to manage that?" asked Harry.

"She keeps trying to get Tonks round for dinner. I think she's hoping Bill will fall for Tonks instead. I hope he does, I'd much rather have her in the family."

"Yeah, that'll work," said Ron sarcastically.
"Listen, no bloke in his right mind's going to fancy Tonks when Fleur's around. I mean,
Tonks is okay-looking when she isn't doing

く言った。

「ヌラーが『アリー』って言う、言い方が好 きなんでしょう? 」

ジニーが軽蔑したように言った。

「違う」

ハリーは、口を挟まなきゃよかったと思いな がら言った。

「僕はただ、ヌラーがーーじゃない、フラー がーー」

「わたしは、トンクスが家族になってくれた ほうがずっといい」ジニーが言った。

「少なくともトンクスはおもしろいもの」 「このごろじゃ、あんまりおもしろくない ぜ」ロンが言った。

「近ごろトンクスを見るたびに、だんだん 『嘆きのマートル』に似てきてるな」

「そんなのフェアじゃないわ」ハーマイオニ ーがピシャリと言った。

「あのことからまだ立ち直っていないのよ… …あの……つまり、あの人はトンクスの従兄 だったんだから!」

ハリーは気が滅入った。シリウスに行き着い てしまった。

ハリーはフォークを取り上げて、スクランブルエッグをガバガバと口に押し込みながら、この部分の会話に誘い込まれることだけは、なんとしても避けたいと思った。

「トンクスとシリウスはお互いにほとんど知 らなかったんだぜ!」ロンが言った。

「シリウスは、トンクスの人生の半分ぐらいの間アズカバンにいたし、それ以前だって、 家族同士が会ったこともなかったしーー」

「それは関係ないわ」ハーマイオニーが言った。

「トンクスは、シリウスが死んだのは自分の せいだと思ってるの!」

「どうしてそんなふうに思うんだ?」ハリー は我を忘れて聞いてしまった。

「だって、トンクスはベラトリックス・レストレンジと戦っていたでしょう? 自分が止めを刺してさえいたら、ベラトリックスがシリウスを殺すことはできなかっただろうって、そう感じていると思う」

「バカげてるよ」ロンが言った。

「生き残った者の罪悪感よ」ハーマイオニー

stupid things to her hair and her nose, but —"

"She's a damn sight nicer than *Phlegm*," said Ginny

"And she's more intelligent, she's an Auror!" said Hermione from the corner.

"Fleur's not stupid, she was good enough to enter the Triwizard Tournament," said Harry.

"Not you as well!" said Hermione bitterly.

"I suppose you like the way Phlegm says "Arry," do you?" asked Ginny scornfully.

"No," said Harry, wishing he hadn't spoken, "I was just saying, Phlegm — I mean, Fleur — "

"I'd much rather have Tonks in the family," said Ginny. "At least she's a laugh."

"She hasn't been much of a laugh lately," said Ron. "Every time I've seen her she's looked more like Moaning Myrtle."

"That's not fair," snapped Hermione. "She still hasn't got over what happened ... you know ... I mean, he was her cousin!"

Harry's heart sank. They had arrived at Sirius. He picked up a fork and began shoveling scrambled eggs into his mouth, hoping to deflect any invitation to join in this part of the conversation.

"Tonks and Sirius barely knew each other!" said Ron. "Sirius was in Azkaban half her life and before that their families never met —"

"That's not the point," said Hermione. "She thinks it was her fault he died!"

"How does she work that one out?" asked Harry, in spite of himself.

"Well, she was fighting Bellatrix Lestrange, wasn't she? I think she feels that if only she had finished her off, Bellatrix couldn't have

がハリーを見ながら言った。

「ルーピンが説得しょうとしているのは知っているけど、トンクスはすっかり落ち込んだきりなの。実際、『変化術』にも問題が出てきているわ!」

「何術だってーー?」

「いままでのように姿形を変えることができ ないの」ハーマイオニーが説明した。

「ショックか何かで、トンクスの能力に変調 をきたしたんだと思うわ」

「そんなことが起こるとは知らなかった」ハリーが言った。

「私も」ハーマイオニーが言った。

「でもきっと、本当に滅入っていると……」 ドアが再び開いて、ウィーズリーおばさんの 顔が飛び出した。

「ジニー」おばさんが囁いた。

「下りてきて、昼食の準備を手伝って」 「わたし、この人たちと話をしてるのよ!」 ジニーが怒った。

「すぐによ!」おばさんはそう言うなり顔を 引っ込めた。

「ヌラーと二人きりにならなくてすむょうに、わたしに来てほしいだけなのょ!」 ジニーが不機嫌に言った。

長い赤毛を見事にフラーそっくりに振って、 両腕をバレリーナのように高く上げ、ジニー は大きく伸びをして部屋を出ていった。

「あなたたちも早く下りてきたほうがいいわ よ」部屋を出しなにジニーが言った。

束の間の静けさに乗じて、ハリーはまた朝食 を食べた。

ハーマイオニーは、フレッドとジョージの段 ボール箱を覗いていたが、ときどきハリーを 横目で見た。

ロンは、ハリーのトーストを勝手に摘まみは じめたが、まだ夢見るような目でドアを見つ めていた。

「これ、なあに?」

しばらくしてハーマイオニーが、小さな望遠 鏡のような物を取り出して聞いた。

「さあ」ロンが答えた。

「でも、フレッドとジョージがここに残していったぐらいだから、たぶん、まだ悪戯専門店に出すには早すぎるんだろ。だから、気を

killed Sirius."

"That's stupid," said Ron.

"It's survivor's guilt," said Hermione. "I know Lupin's tried to talk her round, but she's still really down. She's actually having trouble with her Metamorphosing!"

"With her —?"

"She can't change her appearance like she used to," explained Hermione. "I think her powers must have been affected by shock, or something."

"I didn't know that could happen," said Harry.

"Nor did I," said Hermione, "but I suppose if you're really depressed ..."

The door opened again and Mrs. Weasley popped her head in. "Ginny," she whispered, "come downstairs and help me with the lunch."

"I'm talking to this lot!" said Ginny, outraged.

"Now!" said Mrs. Weasley, and withdrew.

"She only wants me there so she doesn't have to be alone with Phlegm!" said Ginny crossly. She swung her long red hair around in a very good imitation of Fleur and pranced across the room with her arms held aloft like a ballerina.

"You lot had better come down quickly too," she said as she left.

Harry took advantage of the temporary silence to eat more breakfast. Hermione was peering into Fred and George's boxes, though every now and then she cast sideways looks at Harry. Ron, who was now helping himself to Harry's toast, was still gazing dreamily at the door.

つけろよ |

「君のママが、店は流行ってるって言ってた けど」ハリーが言った。

「フレッドとジョージはほんとに商才があるって言ってた」

「それじゃ言い足りないぜ」ロンが言った。 「ガリオン金貨をざっくざく掻き集めてる よ。早く店が見たいな。僕たち、まだダイア ゴン横丁に行ってないんだ。だってママが、 用心には用心して、パパが一緒じゃないとだ めだって言うんだよ。ところがパパは、仕事 でほんとに忙しくて。でも、店はすごいみた いだぜ」

「それで、パーシーは?」ハリーが聞いた。 ウィーズリー家の三男は、家族と仲違いして いた。

「君のママやパパと、また口をきくようになったのかい? |

「いンや」ロンが言った。

「だって、ヴォルデモートが戻ってきたこと では、はじめから君のパパが正しかったっ て、パーシーにもわかったはずだしーー」

「ダンブルドアがおっしゃったわ。他人の正 しさを許すより、間違いを許すほうがずっと たやすい」ハーマイオニーが言った。

「ダンブルドアがね、ロン、あなたのママに そうおっしゃるのを聞いたの」

「ダンブルドアが言いそうな、へんてこりんな言葉だな」ロンが言った。

「ダンブルドアって言えば、今学期、僕に個 人教授してくれるんだってさ」

ハリーが何気なく言った。ロンはトーストに 咽せ、ハーマイオニーは息を呑んだ。

「そんなことを黙ってたなんて!」ロンが言った。

「いま思い出しただけだよ」ハリーは正直に 言った。

「ここの箒小屋で、今朝そう言われたんだ」 「すげー……ダンブルドアの個人教授!」ロ ンは感心したように言った。

「ダンブルドアはどうしてまた……?」 ロンの声が先細りになった。

ハーマイオニーと目を見交わすのを、ハリーは見た。

ハリーはフォークとナイフを置いた。

"What's this?" Hermione asked eventually, holding up what looked like a small telescope.

"Dunno," said Ron, "but if Fred and George've left it here, it's probably not ready for the joke shop yet, so be careful."

"Your mum said the shop's going well," said Harry. "Said Fred and George have got a real flair for business."

"That's an understatement," said Ron. "They're raking in the Galleons! I can't wait to see the place, we haven't been to Diagon Alley yet, because Mum says Dad's got to be there for extra security and he's been really busy at work, but it sounds excellent."

"And what about Percy?" asked Harry; the third-eldest Weasley brother had fallen out with the rest of the family. "Is he talking to your mum and dad again?"

"Nope," said Ron.

"But he knows your dad was right all along now about Voldemort being back —"

"Dumbledore says people find it far easier to forgive others for being wrong than being right," said Hermione. "I heard him telling your mum, Ron."

"Sounds like the sort of mental thing Dumbledore would say," said Ron.

"He's going to be giving me private lessons this year," said Harry conversationally.

Ron choked on his bit of toast, and Hermione gasped.

"You kept that quiet!" said Ron.

"I only just remembered," said Harry honestly. "He told me last night in your broom shed."

"Blimey ... private lessons with

ベッドに座っているだけにしては、ハリーの 心臓の鼓動がやけに早くなった。

ダンブルドアがそうするようにと言った……いまこそその時ではないか? ハリーは、膝の上に流れ込む陽の光に輝いているフォークをじっと見つめたまま、切り出した。

「ダンブルドアがどうして僕に個人教授してくれるのか、はっきりとはわからない。でも、予言のせいに違いないと思う」

ロンもハーマイオニーも黙ったままだった。 ハリーは、二人とも凍りついたのではないか と思った。

ハリーは、フォークに向かって話し続けた。 「ほら、魔法省で連中が盗もうとしたあの予 言だ」

「でも、予言の中身は誰も知らないわ」ハーマイオニーが急いで言った。

「砕けてしまったもの」

「ただ、『日刊予言者』に書いてあったのは --|

ロンが言いかけたが、ハーマイオニーが「シーッ」と制した。

「『日刊予言者』にあったとおりなんだ」 ハリーは意を決して二人を見上げた。

ハーマイオニーは恐れ、ロンは驚いているようだった。

「砕けたガラス球だけが予言を記録していたのではなかった。ダンブルドアの校長室で、 僕は予言の全部を開いた。本物の予言はダン ブルドアに告げられていたから、僕に話して 聞かせることができたんだ。その予言によれ ば」

ハリーは深く息を吸い込んだ。

「ヴォルデモートに止めを刺さなければならないのは、どうやらこの僕らしい……少なくとも、予言によれば、二人のどちらかが生きているかぎり、もう一人は生き残れない」三人は、一瞬、互いに黙って見つめ合った。そのとき、バーンという大音響とともに、ハーマイオニーが黒煙の陰に消えた。

「ハーマイオニー! |

ハリーもロンも同時に叫んだ。朝食の盆がガチャンと床に落ちた。ハリーは何もかもかなぐり捨ててハーマイオニーに飛びついた。 煙の中から、ハーマイオニーが咳き込みなが Dumbledore!" said Ron, looking impressed. "I wonder why he's ...?"

His voice tailed away. Harry saw him and Hermione exchange looks. Harry laid down his knife and fork, his heart beating rather fast considering that all he was doing was sitting in bed. Dumbledore had said to do it. ... Why not now? He fixed his eyes on his fork, which was gleaming in the sunlight streaming into his lap, and said, "I don't know exactly why he's going to be giving me lessons, but I think it must be because of the prophecy."

Neither Ron nor Hermione spoke. Harry had the impression that both had frozen. He continued, still speaking to his fork, "You know, the one they were trying to steal at the Ministry."

"Nobody knows what it said, though," said Hermione quickly. "It got smashed."

"Although the *Prophet* says —" began Ron, but Hermione said, "Shh!"

"The *Prophet's* got it right," said Harry, looking up at them both with a great effort: Hermione seemed frightened and Ron amazed. "That glass ball that smashed wasn't the only record of the prophecy. I heard the whole thing in Dumbledore's office, he was the one the prophecy was made to, so he could tell me. From what it said," Harry took a deep breath, "it looks like I'm the one who's got to finish off Voldemort. ... At least, it said neither of us could live while the other survives."

The three of them gazed at one another in silence for a moment. Then there was a loud bang and Hermione vanished behind a puff of black smoke.

"Hermione!" shouted Harry and Ron; the breakfast tray slid to the floor with a crash.

Hermione emerged, coughing, out of the

ら現れた。

望遠鏡を握り、片方の目に鮮やかな紫の隈取りがついている。

「これを握りしめたの。そしたらこれーーこれ、私にパンチを食らわせたの」ハーマイオニーが喘いだ。

たしかに、望遠鏡の先からバネつきの小さな 拳が飛び出しているのが見えた。

「大丈夫さ」

ロンは笑い出さないようにしょうと必死になっていた。

「ママが治してくれるよ。軽い怪我ならお手のもん——」

ハーマイオニーが急き込んだ。

「ハリー、ああ、ハリー……」

ハーマイオニーは再びハリーのベッドに腰掛けた。

「私たち、いろいろと心配していたの。魔法省から戻ったあと……もちろん、あなたには何も言いたくなかったんだけど、でも、ルシウス・マルフォイが、予言はあなたとヴォルデモートに関わることだって言ってたものだから、それで、もしかしたらこんなことじゃないかって、私たちそう思っていたの……ああ、ハリー……」

ハーマイオニーはハリーをじっと見た。 ハリーの頬にそっと手を添え、そして囁くように言った。

「怖い?」

「いまはそれほどでもない」ハリ**ー**が言った。

「最初に聞いたときは、たしかに……でもいまは、なんだかずっと知っていたような気がする。最後にはあいつと対決しなければならないことを……」

「ダンブルドア自身が君を迎えにいくって聞いたとき、僕たち、君に予言に関わることを何か話すんじゃないか、何かを見せるんじゃないかって思ったんだ」ロンが夢中になって話した。

「僕たち、少しは当たってただろ? 君に見込みがないと思ったら、ダンブルドアは個人教授なんかしないよ。時間のムダ使いなんかーーダンブルドアはきっと、君に勝ち目があると思っているんだ!」

smoke, clutching the telescope and sporting a brilliantly purple black eye.

"I squeezed it and it — it punched me!" she gasped.

And sure enough, they now saw a tiny fist on a long spring protruding from the end of the telescope.

"Don't worry," said Ron, who was plainly trying not to laugh, "Mum'll fix that, she's good at healing minor injuries —"

"Oh well, never mind that now!" said Hermione hastily. "Harry, oh, Harry ..."

She sat down on the edge of his bed again.

"We wondered, after we got back from the Ministry ... Obviously, we didn't want to say anything to you, but from what Lucius Malfoy said about the prophecy, how it was about you and Voldemort, well, we thought it might be something like this. ... Oh, Harry ..." She stared at him, then whispered, "Are you scared?"

"Not as much as I was," said Harry. "When I first heard it, I was ... but now, it seems as though I always knew I'd have to face him in the end. ..."

"When we heard Dumbledore was collecting you in person, we thought he might be telling you something or showing you something to do with the prophecy," said Ron eagerly. "And we were kind of right, weren't we? He wouldn't be giving you lessons if he thought you were a goner, wouldn't waste his time — he must think you've got a chance!"

"That's true," said Hermione. "I wonder what he'll teach you, Harry? Really advanced defensive magic, probably ... powerful countercurses ... anti-jinxes ..."

Harry did not really listen. A warmth was

「そうよ」ハーマイオニーが言った。

「ハリー、いったいあなたに何を教えるのかしら?とっても高度な防衛術かも……強力な反対呪文……呪い崩し……」

ハリーは聞いていなかった。

太陽の光とはまったく関係なく、体中に暖かいものが広がっていた。

胸の固いしこりが溶けていくょうだった。 ロンもハーマイオニーも、見かけよりずっと 強いショックを受けていることはわかってい た。

しかし、二人はいまもハリーの両脇にいる。 ハリーを汚染された危険人物扱いして尻込み したりせず、慰め、力づけてくれている。 ただそれだけで、ハリーにとっては言葉に言 い尽くせないほどの大きな価値があった。

「……それに回避呪文全般とか」ハーマイオニーが言い終えた。

「まあ、少なくともあなたは、今学期履修する科目が一つだけはっきりわかっているわけだから、ロンや私よりましだわ。ふくろうテストの結果は、いつ来るのかしら?」

「そろそろ来るさ。もう一ヶ月も経ってる」 ロンが言った。

「そう言えば」ハリーは今朝の会話をもう一 つ思い出した。

「ダンブルドアが、O. W. Lの結果は、今 日届くだろうって言ってたみたいだ」 「今日?」

ハーマイオニーが叫び声を上げた。

「今日——なんでそれを——ああ、どうしましょう……あなた、それをもっと早く——」 ハーマイオニーが弾かれたように立ち上がった。

「ふくろうが来てないかどうか、確かめてくる……」

十分後、ハリーが服を着て、空の盆を手に階下に下りていくと、ハーマイオニーはじりじり心配しながら台所のテーブルのそばに掛け、ウィーズリーおばさんは、半パンダになったハマイオニーの顔を何とかしようとしていた。

「どうやっても取れないわ」ウィーズリーおばさんが心配そうに言った。

spreading through him that had nothing to do with the sunlight; a tight obstruction in his chest seemed to be dissolving. He knew that Ron and Hermione were more shocked than they were letting on, but the mere fact that they were still there on either side of him, speaking bracing words of comfort, not shrinking from him as though he were contaminated or dangerous, was worth more than he could ever tell them.

"... and evasive enchantments generally," concluded Hermione. "Well, at least you know one lesson you'll be having this year, that's one more than Ron and me. I wonder when our O.W.L. results will come?"

"Can't be long now, it's been a month," said Ron.

"Hang on," said Harry, as another part of last night's conversation came back to him. "I think Dumbledore said our O.W.L. results would be arriving today!"

"Today?" shrieked Hermione. "*Today*? But why didn't you — oh my God — you should have said —"

She leapt to her feet.

"I'm going to see whether any owls have come. ..."

But when Harry arrived downstairs ten minutes later, fully dressed and carrying his empty breakfast tray, it was to find Hermione sitting at the kitchen table in great agitation, while Mrs. Weasley tried to lessen her resemblance to half a panda.

"It just won't budge," Mrs. Weasley was saying anxiously, standing over Hermione with her wand in her hand and a copy of *The Healer's Helpmate* open at "Bruises, Cuts, and Abrasions." "This has always worked before, I just can't understand it."

おばさんはハーマイオニーのそばに立ち、片手に杖を持ち、もう片方には「癒者のいろは」を持って、「切り傷、擦り傷、打撲傷」のページを開けていた。

「いつもはこれでうまくいくのに。まったく どうしたのかしら」

「フレッドとジョージの考えそうな冗談よ。 絶対に取れなくしたんだ」ジニーが言った。 「でも取れてくれなきゃ!」

ハーマイオニーが金切り声を上げた。

「一生こんな顔で過ごすわけにはいかないわ!」

「そうはなりませんよ。解毒剤を見つけます から、心配しないで」

ウィーズリーおばさんが慰めた。

「ビルが、フレッドとジョージがどんなにお もしろいか、あなしてくれまーした!」 フラーが、落ち着き払って微笑んだ。

「ええ、笑いすぎて息もできないわ」ハーマイオニーが噛みついた。

ハーマイオニーは急に立ち上がり、両手を振り合わせて指をひねりながら、台所を往ったり来たりしはじめた。

「ウィーズリーおばさん、ほんとに、ほんとに、午前中にふくろうが来なかった?」

「来ませんよ。来たら気付くはずですもの」 おばさんが辛抱強く言った。

「でもまだ九時にもなっていないのですからね、時間は十分……」

「古代ルーン文字はめちゃめちゃだったわ」 ハーマイオニーが熟に浮かされたように呟い た。

「少なくとも一つ重大な誤訳をしたのは間違いないの。それに『闇の魔術に対する防衛術』の実技は全然よくなかったし。『変身術』は、あのときは大丈夫だと思ったけど、いま考えると――」

「ハーマイオニー、黙れよ。心配なのは君だけじゃないんだぜ!」 ロンが大声を上げた。

「それに、君のほうは、大いによろしいの 『〇・優』を十科目も取ったりしてーー」 「言わないで!言わないで!言わないで!」 ハーマイオニーはヒステリー気味に両手をバ タバタ振った。 "It'll be Fred and George's idea of a funny joke, making sure it can't come off," said Ginny

"But it's got to come off!" squeaked Hermione. "I can't go around looking like this forever!"

"You won't, dear, we'll find an antidote, don't worry," said Mrs. Weasley soothingly.

"Bill told me 'ow Fred and George are very amusing!" said Fleur, smiling serenely.

"Yes, I can hardly breathe for laughing," snapped Hermione.

She jumped up and started walking round and round the kitchen, twisting her fingers together.

"Mrs. Weasley, you're quite, quite sure no owls have arrived this morning?"

"Yes, dear, I'd have noticed," said Mrs. Weasley patiently. "But it's barely nine, there's still plenty of time. ..."

"I know I messed up Ancient Runes," muttered Hermione feverishly, "I definitely made at least one serious mistranslation. And the Defense Against the Dark Arts practical was no good at all. I thought Transfiguration went all right at the time, but looking back —"

"Hermione, will you shut up, you're not the only one who's nervous!" barked Ron. "And when you've got your eleven 'Outstanding' O.W.L.s ..."

"Don't, don't, don't!" said Hermione, flapping her hands hysterically. "I know I've failed everything!"

"What happens if we fail?" Harry asked the room at large, but it was again Hermione who answered.

"We discuss our options with our Head of

「きっと全科目落ちたわ!」

「落ちたらどうなるのかな?」ハリーは部屋 のみんなに質問したのだが、答えはいつもの ようにハーマイオニーから返ってきた。

「寮監に、どういう選択肢があるかを相談するの。先学期の終わりに、マクゴナガル先生 にお聞きしたわ」

ハリーの内臓がのたうった。あんなに朝食を食べなければよかったと思った。

「ボーバトンでは」フラーが満足げに言った。

「やり方がちがいまーすね。わたし、そのおおがいいと思いまーす。試験は六年間勉強してからで、五年ではないでーす。それから……」

フラーの言葉は悲鳴に呑み込まれた。

ハーマイオニーが台所の窓を指差していた。 空に、はっきりと黒い点が三つ見え、だんだ ん近づいてきた。

「間違いなく、あれはふくろうだ」 勢いよく立ち上がって、窓際のハーマイオニ 一のそばに行ったロンが、かすれ声で言っ た。

「それに三羽だ」

ハリーも急いでハーマイオニーのそばに行き、ロンの反対側に立った。

「私たちそれぞれに一羽」

ハーマイオニーは恐ろしげに小さな声で言った。

「ああ、だめ……ああ、だめ……ああ、だめ ……」ハーマイオニーは、ハリーとロンの片 肘をがっちり握った。物凄い力だった。 ふくろうはまっすぐ「隠れ穴」に飛んでき た。

きりりとしたモリフクロウが三羽、家への小 道の上をだんだん低く飛んでくる。

近づくとますますはっきりしてきたが、それ ぞれが大きな四角い封筒を運んでいる。

「ああ、だめー!」

ハーマイオニーが悲鳴を上げた。ハリーの腕がもぎ取られるのではないかというくらいの激痛が走った。

ウィーズリーおばさんが三人を押し分けて、 台所の窓を開けた。

一羽、二羽、三羽と、ふくろうが窓から飛び

House, I asked Professor McGonagall at the end of last term."

Harry's stomach squirmed. He wished he had eaten less breakfast.

"At Beauxbatons," said Fleur complacently, "we 'ad a different way of doing things. I think eet was better. We sat our examinations after six years of study, not five, and then —"

Fleur's words were drowned in a scream. Hermione was pointing through the kitchen window. Three black specks were clearly visible in the sky, growing larger all the time.

"They're definitely owls," said Ron hoarsely, jumping up to join Hermione at the window.

"And there are three of them," said Harry, hastening to her other side.

"One for each of us," said Hermione in a terrified whisper. "Oh no ... oh no ... oh no ..."

She gripped both Harry and Ron tightly around the elbows.

The owls were flying directly at the Burrow, three handsome tawnies, each of which, it became clear as they flew lower over the path leading up to the house, was carrying a large square envelope.

"Oh no!" squealed Hermione.

Mrs. Weasley squeezed past them and opened the kitchen window. One, two, three, the owls soared through it and landed on the table in a neat line. All three of them lifted their right legs.

Harry moved forward. The letter addressed to him was tied to the leg of the owl in the middle. He untied it with fumbling fingers. To his left, Ron was trying to detach his own 込み、テーブルの上にきちんと列を作って降 り立った。

三羽揃って右足を上げた。

ハリーが進み出た。

ハリー宛の手紙はまん中のふくろうの足に結わえつけてあった。

震える指でハリーはそれを解いた。

その左で、ロンが自分の成績をはずそうとしていた。

ハリーの右側で、ハーマイオニーはあまりに 手が震えて、ふくろうを丸ごと震えさせてい た。

台所では誰も口をきかなかった。

ハリーはやっと封筒をはずし、急いで封を切り、中の羊皮紙を広げた。

普通魔法レベル成績

合格

優・0 (大いによろしい)

良·E (期待以上)

可・A (まあまあ)

不合格

不可・P (よくない)

落第・D (どん底)

トロール並・T

ハリー・ジェームズ・ポッターは次の成績を 修めた。

天文学 可

魔法生物飼育学良

呪文学 良

闇の魔術に対する防衛術 優

占い学

不可

薬草学

良

魔法史 魔法薬学 落第

変身術

良良

ハリーは羊皮紙を数回読み、読むたびに息が 楽になった。

大丈夫だ。

results; to his right, Hermione's hands were shaking so much she was making her whole owl tremble.

Nobody in the kitchen spoke. At last, Harry managed to detach the envelope. He slit it open quickly and unfolded the parchment inside.

ORDINARY WIZARDING LEVEL RESULTS

Pass Grades Fail Grade

Outstanding (O) Poor (P)

Exceeds Expectations (E) Dreadful (I

Acceptable (A) Troll (T)

Harry James Potter has achieved:

Astronomy	A
Care of Magical Creatures	Е
Charms	Е
Defense Against the Dark Arts	О
Divination	P
Herbology	Е
History of Magic	D
Potions	Е
Transfiguration	Е

Harry read the parchment through several times, his breathing becoming easier with each reading. It was all right: He had always known that he would fail Divination, and he had had no chance of passing History of Magic, given that he had collapsed halfway through the examination, but he had passed everything else! He ran his finger down the grades ... he

占い学は失敗すると、はじめからわかっていたし、試験の途中で倒れたのだから、魔法史 に合格するはずはなかった。

しかしほかは全部合格だ! ハリーは評価点を 指でたどった……変身術と薬草学はいい成績 で通ったし、魔法薬学でさえ「期待以上」の 良だ! それに、「闇の魔術に対する防衛術」 で「優・O」を修めた。

最高だ!

ハリーは周りを見た。

ハーマイオニーはハリーに背を向けてうなだれているが、ロンは喜んでいた。

「占い学と魔法史だけ落ちたけど、あんなもの、誰が気にするか?」ロンはハリーに向かって満足そうに言った。

「ほらーー替えっこだーー」ハリーはざっと ロンの成績を見た。

「優・0」は一つもない……。

「君が『闇の魔術に対する防衛術』でトップ なのは、わかってたさ」

ロンはハリーの肩にパンチを噛ました。

「俺たち、よくやったよな?」

「よくやったわ! |

ウィーズリーおばさんは誇らしげにロンの髪をくしゃくしゃっと撫でた。

「七ふ・く・ろ・うだなんて、フレッドとジョージを合わせたより多いわ!」

「ハーマイオニー?」

まだ背を向けたままのハーマイオニーに、ジニーが恐る恐る声をかけた。

「どうだったの?」

「私ーー悪くないわ」ハーマイオニーがか細い声で言った。

「冗談やめろよ」ロンがツカツカとハーマイオニーに近づき、成績表を手からサッともぎ取った。

「それ見ろーー『優・O』が九個、『良・E』が一個、『闇の魔術に対する防衛術』 だ!

ロンは半分おもしろそうに、半分呆れてハーマイオニーを見下ろした。

「君、まさか、がっかりしてるんじゃないだ ろうな?」

ハーマイオニーが首を横に振ったが、ハリーは笑い出した。

had passed well in Transfiguration and Herbology, he had even exceeded expectations at Potions! And best of all, he had achieved "Outstanding" at Defense Against the Dark Arts!

He looked around. Hermione had her back to him and her head bent, but Ron was looking delighted.

"Only failed Divination and History of Magic, and who cares about them?" he said happily to Harry. "Here — swap —"

Harry glanced down Ron's grades: There were no "Outstandings" there. ...

"Knew you'd be top at Defense Against the Dark Arts," said Ron, punching Harry on the shoulder. "We've done all right, haven't we?"

"Well done!" said Mrs. Weasley proudly, ruffling Ron's hair. "Seven O.W.L.s, that's more than Fred and George got together!"

"Hermione?" said Ginny tentatively, for Hermione still hadn't turned around. "How did you do?"

"I — not bad," said Hermione in a small voice.

"Oh, come off it," said Ron, striding over to her and whipping her results out of her hand. "Yep — nine 'Outstandings' and one 'Exceeds Expectations' at Defense Against the Dark Arts." He looked down at her, half-amused, half-exasperated. "You're actually disappointed, aren't you?"

Hermione shook her head, but Harry laughed.

"Well, we're N.E.W.T. students now!" grinned Ron. "Mum, are there any more sausages?"

Harry looked back down at his results. They

「さあ、われらはいまや」N・E・W・T学 生だ!」ロンがニヤリと笑った。

「ママ、ソーセージ残ってない?」ハリーは、もう一度自分の成績を見下ろした。 これ以上望めないほどのよい成績だ。

一つだけ、後悔に小さく胸が痛む……闇祓い になる野心はこれでおしまいだった。

『魔法薬学』で必要な成績を取ることができなかった。

できないことは初めからわかっていたが、それでも、あらためて小さな黒い「良・E」の文字を見ると、胃が落ち込むのを感じた。ハリーはいい闇祓いになるだろうと、最初に言ってくれたのが、変身した死喰い人だったことを考えるととても奇妙だったが、なぜかその考えがいままでハリーをとらえてきた。それ以外になりたいものを思いつかなかった。

しかも、一ケ月前に予言を聞いてからは、それがハリーにとって然るべき運命のように思えていた。

……一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ ……

ヴォルデモートを探し出して殺す使命を帯びた、高度に訓練を受けた魔法使いの仲間になれたなら、予言を成就し、自分が生き残る最大のチャンスが得られたのではないだろうか?

were as good as he could have hoped for. He felt just one tiny twinge of regret. ... This was the end of his ambition to become an Auror. He had not secured the required Potions grade. He had known all along that he wouldn't, but he still felt a sinking in his stomach as he looked again at that small black E.

It was odd, really, seeing that it had been a Death Eater in disguise who had first told Harry he would make a good Auror, but somehow the idea had taken hold of him, and he couldn't really think of anything else he would like to be. Moreover, it had seemed the right destiny for him since he had heard the prophecy a few weeks ago. ... Neither can live while the other survives. ... Wouldn't he be living up to the prophecy, and giving himself the best chance of survival, if he joined those highly trained wizards whose job it was to find and kill Voldemort?